法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

古代メソポタミアにおける特定の数字の取り扱いについて

MATSUSHIMA, Eiko / 松島, 英子

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要
(巻 / Volume)
4
(開始ページ / Start Page)
213
(終了ページ / End Page)
226
(発行年 / Year)
2007-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003233

Hosei University Repository

古代メソポタミアにおける特定の数字の取り扱いについて

法政大学キャリアデザイン学部教授　松　島　英　子

はじめに

古代メソポタミアでは、その長い歴史を通じてありとあらゆる種類の文書が作成され、人々の生活の中で記録として残され利用された。「書かれた物」が日常的に、あるいは歴史的に果たした役割には、計り知れないものがある。当時この地で文字を書いたり読んだりする能力を備えていたのは、書記および一部の神殿関係者、一部の高級官僚など限られた人々であったが、文字が占めていた社会的、文化的意義、さらには影響力は甚大であった。メソポタミアで用いられていた楔形文字は、表意的機能と、音節に対応する表音的機能を同時に兼ね備えている。そのためこの双方の機能を適宜使い分けることが可能であり、時に応じて任意に、場合によっては意図的に使い分けがおこなわれた。その結果、文字は本来抽象的なものであるはずなのに、字がそれ自身で実体を持つこと、また時にはある文字が思いがけない具体的な事柄を表現することが起こった。私はかねてからこの現象に注目しており、メソポタミアの人々の説明や思考の回線を形成するにあって、重要な一翼を担っていたのではないかと考えてきた。その観点から、この地に残された多様な文書のそこかしこに見出される様々な事例を集めてきたのだが、今回の小論では、「数字」が特別の意味または実体を含み持って機能していると思われる例を、いくつか列挙してみたいと思う。

言うまでもないことだが、古今東西の地域・文化圏を見渡してみると、ある特定の数にきわめて大きな重要性や意味が付与される現象が観察されることは

Hosei University Repository

少なくない。しかもたとえば「4」「7」「13」のように、多くの地域・文化圏で同じような数が共通に特別視される場合がある。これには様々な理由が考えられようが、いまだ科学的に十分納得のいく説明を与えることはできていない。いくつか異なった研究分野からのアプローチは可能であろう。だが難解な意味論に深入りすることは本稿の目的ではないのでこれを避け、メソポタミアにおける数字の取り扱いの実態を、メソポタミアが我々に残した文字資料に基づきつつ紹介することにする。

とは言うものの、以下で扱うのは膨大な文書の中から私が見つけ出した実例であり、問題のごく一端を垣間見ることにしかならないことを、あらかじめ断っておきたい。この問題を網羅的に扱うには今後とも多くの研究者による作業と時間が必要であることは、誰の眼にも明らかである。ところで「数」と数字とは無論同義ではない。しかしメソポタミア社会において文字はきわめて重要な働きをしており、しかも我々がこの世界を知るための手がかりは、大半が今日残っている文書から得られるのが実情である。それゆえ論述の中では敢えて数と数字を厳密に区別せず、数を表記する文字である数字を対象に議論を進めることとする。なお、文中に（Ⅲ 7）などと出てくる場合、これは第7タブレットの3行目を意味することをあらかじめ記しておきたい。

特定の数字使いの実例

Ⅰ　宗教・文学文書に現れる注目に値する数字

1．有力な神々と数字

メソポタミアの分野ではよく知られたことだが、この地ではかなり古い時期から、パンテオンにおける有力な神々に、それぞれ異なった数字を割り当ててきた。一般に天の神アヌは60、神々の王エンリルは50、神々の知恵者エアは40、月神シーンは30、太陽神シャマシュは20、イシュタル女神は15、雷雲と雨の神アダドは10を、各々の「持ち数字」としていた。これらの数字は神名を表記する際に、神であることを表す限定文字dingirに続ける「表意文字」として、しばしば用いられた。

このような対応関係が成立した理由の一部は推測可能である。月神シーンと

Hosei University Repository

数字30は、以下に言及するテクストの文面から理解されるように、月の満ち欠けの周期に由来したもようである。つまりまったく具体的な結びつきである。ほかの場合はやや事情が複雑になる。パンテオンの頂点に位置する三大神アヌ、エンリル、エアに、六十進法の序列に従って順にそれぞれ60、50、40が割り振られたと理解することには異論があるまい。三大神の次にやや身分ないしは権力が劣る神々が、相応の数字を割り当てられたと考えるのが妥当だが、時代の流れとともに神々の力関係も変化している。実際問題として、dingir＋60（^{d}60）はアヌを意味するだけでなく、時としてエアを表記するために用いられる。どちらであるのか判断するには、文脈に頼るほかない。本論の視点から是非注目しておきたいことは、それぞれの数字に合理性があるかどうかではなく、想像上の世界に住んでいるにせよ具体的な存在であるはずの神々に、具体性と抽象性をあわせ持つ数字を割り振ったという事実である。

ところでわずか一点ではあるが、神名と数字の対応関係に説明を与えようと試みた、神学解釈テクストが今日知られている（*Cuneiform Texts from Babylonian Tablets in the British Museum* XXV, pl. 5, K 170 + Rm 520）[1]。テクストは大きく二つの部分に分かれる。前半はおよそ5行からなり、非常に難解ながら、天体である月が新月から満月に至るまでに見せる形態の変化を順に説明することを主旨としている。テクストの筆者は、月神シーンの「持ち数字」が30であることを、明らかに一ヶ月の周期と関連づけている。さて続く後半、タブレット表面の6行以降裏面の大半にかけては、三つの欄からなる一種の表となっている。一番右側の欄には順にアヌ、エンリル、エア、シーン、シャマシュ、アダド、ベール・マルドゥク、イシュタル、ニヌルタ、ネルガル/シャッカン、ウラシュ/キの神名が記されており、左側の欄にはそれぞれの神々を形容する字句が並ぶ。中央の欄には各々の神名に対応して60、50、40、30、20、6、10、15、50、11、10と列記されている。ただし最後のウラシュ/キに対応する欄に限っては、はじめから数の記載がない。注目されるのは、アダドに通常の表記とは違う6が、マルドゥに10が、ニヌルタに50があてがわれていることである。マルドゥクについては、一番左の形容字句欄のテクストは完全に欠損している。ニヌルタに関しては、左側の欄には欠損があるものの「武器の主」および「エンリルの・・・」という記述が見え、右側の欄に「エンリル

Hosei University Repository

（この場合数字50で表されている）の子ニヌルタ（^{d}*Nin-uruta mār* ^{d}50）」と明記されている。エンリルとニヌルタとの結びつきがここではことさら強調されているように見受けられる。

このテクストの写本は前一千年紀のものであり、おそらく原本の成立時期もさほど遠くない頃であろう。具体的な神々に数字を割り当てたこと、こうした古くからの慣習に「識者」たちが説明を与えようとしたことは、なかなか意味深長である。メソポタミアにおいて数字がどのような機能と性格を持っていたのか理解するために、留意しなければならない事柄である。

2．神話に出てくる6日7夜または7日6夜

大洪水の継続期間

メソポタミアの大洪水伝説として、目下のところかなり断片的な状態であるシュメール語ヴァージョンが一点知られており、アッカド語ヴァージョンとしては『アトラ・ハシース叙事詩』の後半、第2タブレットから第3タブレットにかけての話と、『ギルガメシュ叙事詩』第11タブレットに出てくるエピソードが有名である。いずれの版も古バビロニア時代あたりに原本の成立を想定するのが妥当とされる。この話がメソポタミアの近隣地域に広く伝わり、旧約聖書・創世記の「ノアの方舟」伝説の「モデル」となったことはあまりに有名である。しばしば指摘されるのが、旧約聖書では問題となる大洪水が40日40夜続いたと書かれているのに対し、メソポタミア版に出てくる洪水の継続期間はずっと短く、7日7夜またはそれに類する数となっていることである。シュメール語版で7日7夜（u_4-7-àm gi_6-7-àm）[2]、『アトラ・ハシース叙事詩』でも7日7夜（*7 u_4-mi 7 mi-š* [*i-a-tim*]）と記されている[3]。『ギルガメシュ叙事詩』ではより具体的に、

6 ur-ḫa ù 7 mu-šá-a-ti / il-lak šá-a-ru a-bu-bu mi-ḫu-ú i-sap-pan māta / se-bu-ú u_4-mu i-na ka-šá-a-di [*te-riq?*] *šu-ú*

「6日7夜大風と洪水が起こり、国土を平らにしてしまった。7日目に至ったとき、それは緩やかになった。」

（XI 128 - 130）[4]

と記されている。7日7夜と7日6夜の差をとりたてて問題にする必要はない。

Hosei University Repository

これらの叙事詩が言明する洪水の継続期間は、あくまで象徴的なものである。この場合「7日目」であることがポイントだが、そのことは以下の諸例と比較すればよく分かる。

「ギルガメシュ叙事詩」の場合の6日7夜

われわれの興味は、ともするとこの叙事詩が伝える大洪水の様子を、旧約聖書・創世記における大洪水の記述と比べることに終始しがちだが、洪水の継続期間である6日7夜という数字は、『ギルガメシュ叙事詩』ではほかにも、物語の展開にとって重要な契機となるいくつかの場面に現れる。以下にそうしたエピソードを並べてみよう。

①　この叙事詩の副主人公エンキドゥは、ギルガメシュの相棒となるために神の意思で造られたが、当初は荒野で動物と同じような生活を送っていた。彼を野生から引きずり出しウルクの町に行かせるために、遊び女シャムハトゥが派遣される。彼女に魅せられたエンキドゥは、6日7夜ともに愛の営みをおこなった（I 194：*6 ur-ri 7 mušāti*）。彼はその後荒野に戻ろうとするが、動物たちは走り去る。エンキドゥがもはや野生の存在ではなくなってしまったからである。彼は遊び女に誘われて町への道をたどり、やがてギルガメシュと出会い、格闘の末に無二の親友となって、ともに冒険旅行に出かけることとなる。野生の存在であったエンキドゥが町で暮らす「人」となるために要したのは、6日7夜の期間であった。

②　やがてエンキドゥは病に襲われ、ギルガメシュの嘆きのうちにこの世を去る。親友の死に我を忘れたギルガメシュは、その遺骸を抱きしめ6日7夜泣き続けた（X 135に明記）。ついにエンキドゥの遺骸は腐敗して鼻から蛆虫が落ちる状態になる。ここにも6日7夜の数字が現れる。人の肉体が生命体から質を変え、土に還るための時間と捉えることが出来よう。

③　エンキドゥの死に衝撃を受けたギルガメシュは、人にとって死は免れることができない運命なのかどうか問い続け、「不死」をもとめてさまよい歩く。かつて世界を破壊した大洪水を生き残り、永遠の生を神々から授かったウタ・ナピシュティを尋ねて困難な旅を続けた彼は、ついに念願かなってこの老人に会うことができた。そこで大洪水の話を聞くのだが、「永遠の生」を得たいと

Hosei University Repository

執着するギルガメシュを前にしたウタ・ナピシュティは、物語のあと彼に6日7夜眠らずに過ごすよう命ずる（XI 209 : *e ta-at-til 6 ur-ri ù 7 mu-šá-a-ti*「6日7夜お前は寝てはならない」）。ギルガメシュはすぐさまこの試練に挑むのだが、たちまち睡魔に襲われる。7日目の朝ウタ・ナピシュティに揺り起こされたギルガメシュが見たものは、彼が眠った夜の数を示す7個のパンであった。永遠の生の獲得を阻み、死すべき人間の運命を引き受ける分かれ目となったのは、6日7夜の時だったのである。

『ネルガルとエレシュキガル』の場合の6夜7日

『ネルガルとエレシュキガル』は天上界の神であったネルガルが、冥界の王の地位に就くまでの経緯を説明する神話である。現在二つのヴァージョンが知られていて、短いほうのヴァージョンの写本が前二千年紀中葉であり、作品の成立から程遠くない頃のものと思われている。長いほうのヴァージョンは前8世紀に年代付けられるスルタンテペ出土の写本と、ウルク出土の新バビロニア写本から再構成されるが、この中に出てくるエピソードにおいて、6夜7日が問題となる。

すなわち天上界の神々が毎月催す「家族の食卓」に招かれた冥界の女王エレシュキガルは、代理出席の使者を派遣した。天の神々の姉妹である高位の女神エレシュキガルの使者に、すべての神々は丁重な挨拶をおこなったが、ただ一人使者を無視した男神がいた。報告を受けたエレシュキガルは激怒して、この無礼者を冥界に引きずりおろし、死者の仲間とするべきであると天の神々に訴えた。ネルガルは抵抗するものの、結局は冥界に行くはめになる。ところが到着したネルガルを見たエレシュキガルは、彼に一目惚れしてしまい、強引に誘惑する。こうしてネルガルとエレシュキガルは6夜をともに寝所で過ごす。7日目を迎えてネルガルは我にかえり、もはや天上界に戻れない身となったのではないかと危惧し、エレシュキガルのもとを去ろうとする（IV 11' − 15'）。彼が出ていった後、エレシュキガルは恋人に去られた悲しみを天の神々に強く訴え、ネルガルを自分の許に返さないなら死者を地上に上らせて生者を苦しめると脅す。終にネルガルは、冥界の女王の夫となるべく再び下り、地下世界を支配する王の地位に就く[5]。

Hosei University Repository

これまで見てきたエピソードと同様に、この話で事柄の契機を与えた期間は6日7夜、すなわち「7」という数を核とした期間である。問題はネルガルが冥界に7日間とどまったことである。天上界の存在であるという本質を失い、地下の異質な世界に住む運命を引き受ける羽目に陥ったのは、7日という時間を過ごしたことであった。

こうして見たいくつかのエピソードに共通する現象は、神であれ人間であれ、ある者の存在の本質、言い換えれば「さだめ・運命」を変えるとき、6日7夜、7日7夜、6夜7日などの時間が関わってくることである。数字の表示の仕方は三通りだが、問題は7日ないしは7夜という、「7」を中核とした期間であろう。これがある存在の本質を変える条件として、常に象徴的に用いられていることは明らかである。

3．宗教・文学テクストに散見する「シビットゥ」

メソポタミアの宗教・文学テクストには、7つの個体からなるグループがしばしば言及されている。シビットゥ*sibittu*と呼ばれるこのグループを構成する要素は、風（『エヌーマ・エリシュ叙事詩』Ⅳ47）であったり、薫香や装飾品であったりすることもあるが、天体（主として星、特にすばる星団）や神々、あるいは神々と呼ぶにはやや問題があるがときに猛烈な力を振るう超自然の存在であったりする[6]。たとえば叙事詩『エッラとイシュム』に登場する7人組の神々の場合、各々は個性的な存在ではない。常に7人一組の「シビットゥ/シビッティ」として行動するのだが、エッラ神をけしかけて戦闘に向かわせ、彼とともにバビロニアの各地を蹂躙してまわる。このような存在は文学テクストのみならず、王碑文などにも言及されることがあるが、個々の性格や役割が具体的に説明されている事例を私は知らない。あるまとまった力または機能を「シビットゥ/シビッティ」という呼称で表しているに過ぎないのではなかろうか。とはいうものの、ここにまた数字7が使われていることは、特記しておかねばなるまい。

このほかにも、神話『女神イシュタルの冥界下り』では、冥界の神々が住む宮殿を「7重の外壁」がとり囲み、それぞれに門が構えられていて番人が守っ

Hosei University Repository

ている様子が語られている。「7」はこのように随所に使われる数字である[7]。

4.『エヌーマ・エリシュ叙事詩』に出てくる若干の数字

バビロンの主神マルドゥクが、新しい世代の代表としてパンテオンの最高位に登りつめたのは、諸説はあるものの一般に前二千年紀のこととされているが、彼の昇進を理由付けるために作られた説話『エヌーマ・エリシュ叙事詩』では、所々に物語の展開と密接に関わると思われる「数」が登場する。

このうちもっとも有名なのは、「マルドゥクの50の名前」であろう。作品の最後を飾るクライマックスであり、タブレットVI 123行目からタブレットVIIのほぼ全体を占めるという、長大な構成になっている。テクストは神々の敵を倒し彼らの王となったマルドゥクに対して、感謝の気持ちを込め彼をたたえるために神々が贈った「50の名前」を列挙し、それぞれに簡潔な「説明」の文章が付くというものである。それぞれの名前は、この英雄神に帰属する特段の権威の様々な側面を表現している。この「名前」については、『エヌーマ・エリシュ叙事詩』とは別にややこしい「注釈書」が存在していて、私はこれを利用して別稿を準備する予定であるため、詳しい議論はそちらに譲りたい。ただ本稿では50という数とその出現について、簡潔に言及しておきたい。

実際に『エヌーマ・エリシュ叙事詩』のタブレットVI 123行以降の文面を見ながら拾い出してみると、マルドゥクに贈呈された名前の数は、どう勘定しても50を若干超える。しかしテクストでは「50」の数字が繰り返し歌い上げられている。ではなぜ「50の名前」なのだろうか？これはマルドゥクが登場する以前に神々の王とされていたエンリルの数字が、Ⅰの1で述べたように50であったからに他ならない。先に言及したテクスト（K 170 + Rm 520）ではマルドゥクの数字は「10」とされ、一方で伝統的な神々の系図でエンリルの息子とされるニヌルタに、父と同様の50があてがわれていた。しかし『エヌーマ・エリシュ』では、系図上はエア神の息子であるマルドゥクが、パンテオンのなかの力関係の変化によって最高の地位を獲得し、事実上エンリルの後継者となったことを印象づけようと強く意識しているため、ことさら50という数を強調する。このことは作品全体の構成に明確に現れている。

すなわち、この叙事詩に初めてマルドゥクが登場する場面において、次のよ

Hosei University Repository

うな叙述がおこなわれている。

la-biš mé-lam-mé eš-ret DINGIR^{meš} *ša-qiš it-pur*

pul-ḫa-a-tu ḫa-šat-si-na e-li-šú kám-ra

「彼は（神）10人分のメランムを身に帯び神々しく装った。

50の畏怖がその上に積み上げられた。」

(I 103-04)

そして数々のエピソードの後、タブレットVI 120－21行の「我々がどの名を呼ぶにせよ彼（=マルドゥク）こそがわれわれの神なのだ。彼の50の名を呼ぼう！」との掛け声とともに、名前が列挙されることになる。

つまりこの作品自体に「50」という枠がはめられているわけで、かなり意図的に構成されていることがよくわかる。見方を変えれば、神の権威づけあるいは性格づけに数字の力が働いたわけで、数が持つ不思議な抽象性と具体性が同時に使われたことになる。

『エヌーマ・エリシュ』には他にも気になる数字が現れている。とりわけ注目されるのが、生まれたばかりのマルドゥクを形容した次の文である。

erba(IV) *ināti-šu erba*(IV) *uzunāti-šu*

「彼の眼は４つ、彼の耳は４つ」

(I 95)

４は四方（東西南北すなわち全世界）を象徴する数字として、メソポタミアでは頻繁に使われている。これも先の７と同様に特段の重要性を持つ数である。４という数として、あるいは４つの具体物あるいは４人組みという形をとって文中に出てくるのは、７の場合と同様である[8]。

Ⅱ　メソポタミアの王碑文に散見する特定の数字の取り扱い

ここまでは文学作品に見られるいくつかの数字使いの例をを見てきた。ところで文学作品以外の文書にも、数字を特別な意味または意図をこめて使用している例を見ることがある。有力な王のプロパガンダの表明である「王碑文」のなかに散見する例については、拙稿「メソポタミアにおける文字と思考についての一考察」『法政大学キャリアデザイン学部紀要３号』（2006年３月、pp. 257-275）のなかで紹介した。丹念に探せば他にも例は拾い出せるだろうが、

Hosei University Repository

この方面での作業は昨年来いっこうに進展していない。それゆえ本稿では、論旨に最低限必要な範囲で、以下にごく簡単に列挙する。

1．前9世紀のアッシリア王アッシュルナシルパル2世（前883-859年）は、新しい町カルフを造営し遷都したが、王宮の披露のために大勢の人々を招き大宴会を催した。10日間に及んだ宴の食卓には、有り余るご馳走が並べられ、料理に用いた品々は全部で74種類に及んだ。招かれた人々は領土内から47,074人、外国からの招待客5,000人、カルフの市民16,000人、廷臣1,500人、総計で69,574人であった[9]。気になるのは7と4という数字である[10]。むしろ、国内からの招待客の数47,074を見るならば、7と4という数字に注目したほうがよいのかもしれない。この二つの数字が特別な文脈の中でしばしば登場することは、先におこなった文学作品の検討の中で見てきたとおりである。

2．およそ一世紀半の後に登場したアッシリア王サルゴン2世（前721-705年）は、自ら新しい都ドゥル・シャルキンを造営するに際して、町を取り囲む周壁の長さを、「私の名前の呼び方である16,280キュビットに定めた」と宣言した。これはかねてからよく知られたエピソードで、この文言すなわち数字とサルゴンの名前との対応の理屈を解明しようと、幾人かの研究者が試みたが、いまだ議論が続いている[11]。楔形文字で「サルゴン」と書く際の文字使いのひとつが持つ「字画数」から、この数字が導かれたと解釈する説があるが、広く認知されているわけではない。われわれが今この議論に深入りをする必要はあるまい。ただ重要なことは、王の名前とある特定の数字の間に、「合理的な関わり」があると明言されていることである。この合理性は、われわれの感覚で理解できるものではないかもしれないが、何らかの「（屁）理屈」は介在したはずである。

3．アッシリア王エサルハドン（前680－669年）がバビロン復興事業に着手した際の口実

エサルハドンは、先王が行った大規模な破壊からバビロンの町と守護神マルドゥクの神殿を復興するにあたって、次のように説明した。

「マルドゥクは（バビロンの民に対して怒り）町を見捨てる期間を70年

Hosei University Repository

と（運命のタブレットに）記した。（だが）慈しみ深いマルドゥクは心を和ませ文字を入れ替えて、11年目に町に帰ることにした」[12]。

私はこの例に初めて接したとき大変驚き、その結果メソポタミアの文字システムと「理屈づけ」との関わりに興味を持つようになった。この地の楔形文字システムでは六十進法と十進法が併用されているため、数字の60と１とは同じ文字で表記される。60+10を左右入れ替えると１+10と同じ表記になるので、11年目に復興事業に着手するとしたのである。

なお、マルドゥクが当初バビロンを見捨てる期間とした「70」という数字自体も、先に見た数字7とのかかわりを考えると意味深長ではあるまいか。

おわりに

こうしてメソポタミアの文学作品や王碑文に見られる、いくつかの「数字使い」の例を見てきた。この世界において、特定の「数」が特別の意義を持ち、具体的な実質を備えたものと認識されていたことは、検討してきた例をみれば明らかであろう。冒頭にも述べたように、このこと自体は特殊メソポタミア的現象ではない。むしろどの地域や文化においても、形態はさまざまだが見られることである。

しかしいくつかの実例を集め比較することによって、この地の人々が共有していた認識が漠然とではあるが浮上しつつあるのではなかろうか。

一つは「７」という数が、ある一定の期間の表示に使われていたこと、そしてメソポタミアにおいてはこの時間が、神であれ人であれ、ある存在がその属性を変えるためにかかる期間と認識されていた、ということである。これは『ギルガメシュ叙事詩』における６日７夜、『ネルガルとエレシュキガル』における６夜７日を見れば明瞭である。「大洪水」の継続期間が伝統的に７日７夜と伝えられて来たことについても、大洪水以前の人間と以降の人間とが、メソポタミアの人々の意識の中で明瞭に区別されていたことを考えると、同様の解釈が適用できる[13]。

「7」の例を見るまでもなく、数字には具体性と抽象性が同時並行的に内在する。このことをよく認識していたメソポタミアの人々は、神々に特定の数を割

Hosei University Repository

り当てることを思いついた。その原因や理屈がいかなるものであれ、やがて「数字」がよりいっそうの力を持つようになる。「マルドゥクの50の名前」のように、神々の王の正当性の説明あるいは印象づけに、数字が利用されたり、作品の構成に数字の枠がはめられたりする現象が現れた。

この小論の中で、私は「数」と「数字」の二語を厳密に区別しなかった。その理由は先にも述べたが、とりわけメソポタミアがかなり堅固な「文字社会」だったと考えるからである。表意的機能と表音的機能を兼ね備えていた楔形文字は、抽象的な側面と具体的な側面を同時並行的に持つことになる。メソポタミアの数字は具体的な実数を表すと同時に、抽象的概念を内側に抱え込んでいる。それはこの地の文字自体の特徴でもあるが、「数」という概念そのものの特性でもある。本稿で「数」と「数字」をほぼ同義で用いてきたのは、このような理由による。しかもこのことによって、数字がときに思いがけない力を持ち、ときに「理屈」の根拠を与えるという現象さえ起きた。若干の王碑文の例は数字が持つこの力をかなり意識的に利用したものだが、それに類したことは様々な場面で見られたことであろう。

Marco De Odoricoは本稿の注(7)ほかで引用した*The Use of Numbers and Quantifications in the Assyrian Royal Inscriptions*で、アッシリアの王碑文に出てくる数字（兵士の数、戦利品の集計数など）を丹念に吟味した。王碑文で使われている数字にどれほどの信憑性あるいは合理性があるのか、検討したことには大きな意義がある。取り扱いの範囲がアッシリアの王碑文に限っているとはいえ、メソポタミアの文書に出てくる「数」を対象とした研究に本格的に取り組んだ意義は大きい。実際、兵士や戦利品の数をはじめとする数値は、あるていど人の手が入ったものであるらしい。これは権力者・為政者のプロパガンダである王碑文としては、ごく当然のことといえよう。もっとも政治家が出来事に伴う数値を過大あるいは過小に言明するのは、メソポタミアに限ったことでもなければ、古代世界に限ったことでもないが。

いずれにしても文書における数字は、「本当に正確な数」が記録されることもあり、ことさらに「作った数」が記載されることもあり、また象徴的な数が表記されることもある。だが正確な数が記されていない場合でも、使われている数字には、それなりの意図と意義が込められている。発話者のメッセージを

Hosei University Repository

読み解くことはもちろんのこと、数字が表すものから人々の意識を探ることは可能であろう。

数字にしろその他の文字にしろ、普段の我々の生活にとって、空気同様に「あって当たり前」で深くその意味を問い詰めない存在になっているが、少し立ち止まって考えてみると、とてつもなく大きな力を持っていることがわかる。古代メソポタミアの人々は、今日のわれわれが見落としがちなこの問題を、遥か昔の世界に住んでいながら、しっかりと認識していたのではあるまいか。

[注]

(1) 翻字、翻訳はA. Livingstone, *Mystical and Mythological Explanatory Works of Babylonian and Assyrian Scholars*, Oxford 1986, p. 30 ff. 同じくp. 44 ff. に解説がある。

(2) M. Civil, "The Sumerian Flood Story", *in* W.G. Lambert and A.R. Millard, *Atra-ḫasīs, The Babylonian Story of the Flood*, Oxford 1969, p. 142, V 203.

(3) 前掲書 p. 96, III iv 24.

(4) A.R. George, *The Babylonian Gilgamesh Epic*, Oxford 2003, vol. I, pp. 710－11. 写本によっては、「6日6夜」と記されている。なお、以下本稿文中における『ギルガメシュ叙事詩』からの引用テクストは、このA.R. Georgeの編纂を基準として用いることにする。

(5) 今回はB. R. Foster, *Before the Muses, an Anthology of Akkadian Literature*, Bethesda 1993, vol. I p. 423を参照した。

(6) *The Chicago Assyrian Dictionary*, S, pp. 230b－31b.

(7) 前掲書 pp. 203b－204a (sebu) ほかも参照。「7」の象徴性については研究者の間で随時注目されてきた。Marco De Odorico, *The Use of Numbers and Quantifications in the Assyrian Royal Inscriptions* (SAAS III), Helsinki 1995, p. 142, notes 129, 130.

(8) *The Chicago Assyrian Dictionary*, E, pp. 256a－58a.

(9) D. Wiseman, *Iraq* 14 =A. K. Grayson, *Assyrian Rulers of the Early First Millenium BC*, I, (RIMA 2), Toronto 1991, 288 ff.

(10) Marco De Odorico, 前掲書 pp. 141－2.

(11) Marco De Odorico, 前掲書 p. 140－1, notes 112－120.

Hosei University Repository

(12) R. Borger, *Die Inschriften Asarhaddons Königs von Assyrien*, Graz 1956, 11, episode 10 ほか。

(13) 伝統的に大洪水以前の人間は、おそろしく長命であったとされる。大洪水以降、人間の寿命は現人類のそれと同様となり、病や障害を持つ人々が含まれるようになったという。

(付記) 本稿は2007年度法政大学特別研究助成金（課題「文字と思考の文化史－メソポタミアに学ぶ」）の研究成果をとり入れたものである。

Hosei University Repository

Symbolic Numbers in Primary Sources of Ancient Mesopotamia

Eiko MATSUSHIMA

This article is a continuation of the article "Scripts and Thinking in Ancient Mesopotamia," published in Bulletin of the Faculty of Lifelong and Career Studies, vol. 3, 2006.

In Ancient Mesopotamia, where the cuneiform script was born and used for roughly three thousand years, scribes employed both phonograms and ideograms during the same period according to tradition and certain circumstances. The fact that a kind of double system of writing was current for a

Hosei University Repository

long time caused many complications, but certain scholars have taken advantage of the duality in order to offer particular explications. We actualy find several numbers used with special symbolic values.

This paper will attempt to collect a certain number of materials concerning this phenomenon. These are:

—Symbolic numbers attributed to great godss

—Six/seven days and six/seven nights referred to in the *Gilgameš Epic* as well as in the *Atrta-ḫasīs Epic* and the *Nergal and Ereškigal.*

—Seven gods or the like in Mesopotamian religious tradition

—50 names of Marduk in the *Enūma Eliš Epic* (revised)

—Other numbers found in the *Enūma Eliš Epic*

—Several episodes found in Assyrian royal inscriptions (containing number symbolism)

These examples tell us that numbers could have substance and certain usefulness in the minds of the people of Ancient Mesopotamia.